

S. Kuwayama, *Across the Hindukush of the First Millennium. A Collection of the Papers*

吉田 豊

パキスタンとの国境近くのアフガニスタンのハッダで最近発見されたと思われる樺皮に書かれたカローシユティー文字仏典を研究しているワシントン大学の R. Salomon 教授は、Greater Gandhara「大ガンダーラ」という名称を考案した。(Cf. *Ancient Buddhist scrolls from Gandhara. The British Library Kharoshthi fragments*, London, 1999, pp. 2-3.) ペシャワル周辺の狭義のガンダーラに対して、「大ガンダーラ」は西はアフガニスタン南部、東はタキシラの東までを含む地域で、かつてガンダーラ語やガンダーラ美術を共有した地域だとしている。桑山氏はまさにこの「大ガンダーラ」地域の遺跡を発掘・踏査してきた。そしてその調査の報告だけでなくとどまらず、遺跡の編年を主な目的としてインドと中国の間を行歴した僧侶の伝記を詳しく分析し、まさに内外で他の追隨を許さない研究成果を世に問い続けてきている。当の桑山氏は「大ガンダーラ」に対するよりおそい時代の名称として「汎カーピシー (Pan-Kapish)」という用語を作ったが、「大ガンダーラ」ないし「汎カーピシー」こそが、中国で「罽賓」と呼んだ地域ではなかったか？ 罽賓という地名によって指示される地

域についても桑山氏によって詳しく論じられているが、時代ごとに指示地域が変わるということは、「大ガンダーラ」において時代ごとに、政治経済（あるいは仏教）の中心となる地域が変わったことと関係しているに違いない。

本書は、桑山氏の京都大学人文科学研究所退官に際して、氏がかつて「大ガンダーラ」（本書のタイトルの across the Hindukush がそれに当たる）の遺跡に関して発表した英文の論文を集めて一冊の本にしたものである。そしてこの本を、二〇〇〇年一月に六四歳の誕生日を目前にして他界された Mr. T. addati 教授に捧げている。イタリヤの T. addati 教授と桑山氏は研究分野を同じくする研究者として、特に親しくしておられたのであった。

まず収録された一六編の論文のタイトルを掲げておく。日本人の読者の便宜のために、内容が重なる日本語の論著を添えておくだし桑山氏は日本語で書かれた論文の英語版を発表するという形態をとらないことが多く、複数の論考をあげなければならないこともあることは了承されたい。なお桑山氏の二〇〇二年三月までの著述目録は、『東方学報』京都 75, 2003, pp. 411-417 に掲載されている。（またより詳しい著作リストおよび氏の略歴は、退官を記念したパーティーの会場で出席者に配布された。評者は作成者の稲葉穰氏のご厚意により入手することができた。ここに記して謝意を表す。）

1 Buddhist establishment in Taxila and Gandhara. A chronological review, pp. 1-11.

「タキシラ仏寺の伽藍構成」『東方学報』京都 46, 1974, pp. 327-354；「タキシラガンダーラの仏教寺院」『パキスタ

- ンニガンターラ美術展図録』東京 1984, pp. 122-127 ; 『カービシーガンターラ史研究』(以下『博論』と略す) pp. 1-32.
- 2 The square podium in Taxila, its introduction, pp. 12-19. 「ストゥーパ方形基台の由来」『足利惲氏教授喜寿記念インド学オリエント学論集』東京 1978, pp. 197-212 ; 『博論』, pp. 1-32.
- 3 The Buddha's bowl in Gandhara, pp. 20-43. 「罽賓の鉢」『展覧——インドの考古学』東京 1983, pp. 595-607 ; 『博論』, pp. 43-59, 131-140, 149-154.
- 4 The wheel-shaped structure inside stupa. A hidden import from Augustan Rome, pp. 44-68. 「アウグストゥス霊廟と大ストゥーパ——車輪状構造の由来——」『東方学報』京都 70, 1998, pp. 566-506 (逆ページ)。
Shah-j-i-ki Dheri before Kanishka, pp. 69-89.
「Shah-j-i-ki Dheri主塔の遷変」『東方学報』京都 67, 1995, pp. 408-331 (逆ページ)。このテーマに関しつは別冊一九九七年に英文の著書が出版された。
- 6 Aspects of stupa court at Hadda, Tapa Shotor and Lalma, pp. 90-106. 「ハッタ最近の発掘に関する問題」『東方学報』京都 45, 1973, pp. 335-357.
- 7 The Hephthalites in Tokharistan and Gandhara, pp. 107-139. 「ナローン・ラヤシヤスと破仏」『日本オリエント学会創立
- 三十五周年記念オリエント学論集』東京 1990, pp. 133-152 ; 「トハリスターンのエフタル、チュルクとその城国」『三笠宮殿下古希記念オリエント学論集』東京 1985, pp. 140-152 ; 『博論』, pp. 91-162, 399-411.
- 8 Two itineraries concerning the emergence of the colossi in Bamiyan, pp. 140-155.
- 9 Bamiyan and its Buddhist activities, pp. 156-161. (上掲11頁)「ペーサーン私注」『建築史料』2, 1984, pp. 127-150 ; 「ペーサーン大仏成立にかかわる新たな発見」『東方学報』京都 57, 1985, pp. 109-209 ; 『博論』, pp. 91-162, 340-349, 411-431.
- 10 A new date for Begram III, pp. 162-172.
- 11 The horizon of Begram III and beyond. A chronological interpretation of the evidence for monuments in the Kapisi-Kabul-Ghazni region, pp. 173-199. (上掲6頁)「七世紀にわたるペーサーンの存在」『西南アジア研究』30, 1989, pp. 21-55 ; 『博論』, pp. 163-227.
- 12 Zhun, Aruna and two superimposed shrines at Khair Khana, Kabul, pp. 200-207. 「葱嶺山と岡路篠山」『考古学論考——小林行雄博士古希記念論文集』東京 1982, pp. 1068-1086 ; 『博論』, pp. 297-308.
- 13 Identity of Napki coins, pp. 208-221. 『博論』, pp. 173-177 ; 「ナローン・ラヤシヤス Kapisi-Kabul-Ghazni 地方の貨幣と支配者」『東方学報』京都 65, 1993, pp.

430-381 (逆ギーン)。

- 14 The Turki Shahis and relevant Brahmanical sculptures in East Afghanistan, pp. 222-248.

「大理石ヒンドゥー像はヒンドゥー王朝のものか」『東方学報』京都40, 1972, pp. 1-54; 『博論』pp. 308-340.

- 15 The inscription of Ganēśa from Gardez and a chronology of the Turki Shahis, pp. 249-259.

「ガネーシャ神像碑銘にみえるカーブル突厥王の編年」『西南アジア研究』35, 1992, pp. 22-38.

- 16 Dating Yasovarman of Kanauj on the evidence of Huichao, pp. 260-270.

『慧超往五天竺国伝研究』京都1992, pp. 1-11, 115-120.

これらの論文は論文3をのぞけば、ほぼ扱われているテーマの時代順に配列されていて、その点では『博論』と同じ構成になっている。ただし『博論』以降に発表された論文も少なくない。論文4・5・13・14・15・16がそれである。これらは早い時期のガンダーラのストゥーパの建築様式にかかわるもの(論文1・2・4・5・6)と、五世紀以降のガンダーラ及び六世紀以降のカーピシー・カーブル地方、バミヤーンの遺跡や発掘物に関する論考の二つのグループに分類される。これら一六編の論文で桑山氏のこれまでの研究の中核はおさえられているといえるが、氏の研究の副産物とも言える、玄奘に関する一連の論著や、東方にもたらされたササン朝の図像に関する諸研究(ササンのコインや金銀器、法隆寺の錦の紋様についての論考)などは含まれていない。日本では玄奘に対する興味が高く、最近の玄奘に対する日本人の

イメージは多くを桑山氏の見解に負っていることなどを勘案すれば、本書に収められた論文だけでは、氏のこれまでの多大な貢献の全体像を見ることはできない。

本書評を行うにあたってまず断っておかなければならないのは、評者はイスラム化以前のイランの言語、とりわけソグド語を研究対象とする言語学文献学者であって、桑山氏が専攻する考古学については専門的な知識を持たないことである。それが本書の書評を担当することにしたのは、本書で扱われている地域と時代の主要な部分が、評者が関心を持つバクトリア語が使われた時代と地域にかかわるからである。周知のように、一九九〇年代からタリバーン支配下のアフガニスタンで、三つの重要な文献群の発見があった。第一は上述したカローシュティー文字仏典、第二はバミヤーンで入手されたらしいおびただしい数の仏典で、現在はその所有者にちなんでスコイエンIIコレクションと呼ばれている。第三は、出土地は不明であるものの、大半がヒンドウークシユ山脈の北、ルーイ(古くはローブと呼ばれた)の領主の文書庫に由来するらしいバクトリア語の世俗文献である。ここにはまたラバタクで発見されたカニシカ碑文の発見も含めることができる。

これらのバクトリア語の世俗資料の内容の解明には、この地域のイスラム化以前の歴史地理に関する理解は不可欠である。日本では古くは榎一雄がエフタルの歴史を解明する目的で一連の論文を公表したが、その後は桑山氏がこの地域の遺跡を発掘調査し、それらの遺跡の歴史的な背景を解明すべく、文献史料を詳細に検討している。一例をあげよう。N. Sims-Williams が二〇〇〇年に発表したバクトリア語文書で西暦七〇三年に書かれたと考えら

れる契約文書 (*Bactrian documents*, I, Oxford, pp. 94-97) には、当時の支配者として *uzayrargo boxoxano* 「バガトル」(という称号を持つ) *bukulah* (と云う名前の人物) が言及されている。文書の発表当時には問題の部分は正しく読むことができず、後に文書の現物を見る過程でこの正しい読みを発見したという知らせを受けた。Sims-Williams 氏から、当該の支配者について何かアイディアはないかという質問を受けたとき、桑山氏の『博論』を読んでいた評者は、すぐに西暦七〇五年に中国に入朝した吐火羅葉護の弟の僕羅に思い当たり、そのことを知らせた。(本書 p. 139 も参照)。おそらくは同一人物と考えられるから、この発見の歴史的な意義は小さくない。最近ではまたバーミヤーンの西一〇〇キロほどの場所で見つかったストウバーの遺跡で、八世紀初めのバクトリア語碑文が発見されたというニュースが届いており、内容の解明には漢文の史料利用は不可欠となるであろう。アフガニスタンで出土した他の二つの文献群でも、問題となる時代と地域は桑山氏のカバーする研究分野にすっぽりおさまる。すなわちハッダの仏教遺跡や仏教国としてのバーミヤーンは桑山氏がまさに研究の対象としているテーマである。(ちなみに論文 6 では、ハッダの仏教遺跡の編年が重要なテーマとなっているが、問題のカローシユティール文字仏典が紀元後一世紀に比定されるとする Salomon の説は桑山氏にとっても興味深いであろう。) 従って考古学者や美術史家だけでなく、これら三群の文献を扱う文献学者や仏教学者たちも桑山氏の一連の研究から大いに裨益するであろう。例えば、バーミヤーンにおける仏教の興隆が六世紀後半以降だとする桑山説(論文 8・9)に従えば、スコイエン II コレ

クシヨンの仏典で、書体からそれより古いとされるものは、バーミヤーンで筆写されたのではなく、別の地域から搬入されたことになる。いずれにしても漢文文献を駆使した氏の研究成果は、とりわけ欧米の研究者にとって便利であるに違いなく、種々の出版物に分散した桑山氏の英語による論文が一つの本にまとめられたことは朗報であろう。一方で本書に収められた英文の論文には対応する日本語の論著があるので、われわれ日本人には特に読む必要がないようにも見えるが、その実は、下にも述べるような理由で、当該の問題に関する氏の最新の見解を知るためには本書に目を通すことが必要である。

とはいえ本書はすでに発表された論文を集めたもので、本書に固有の新しい貢献というものはない。また評者自身の学問的背景から、収録されたすべての論文の内容に精通しているわけでもない。それどころか内容を吟味できる論文のほうが少ない。それ故、下では評者が特に興味を持った論文に関して、桑山氏の貢献や他の研究者との見解の相違、当該のテーマについての論文発表後の展開など、気がついたことをいくらか書いておくことにする。

エフタルは謎の民族で多くの不明な点が残されている。収録された論文では最長の論文 7 で、桑山氏は従来常識とされているエフタルがガンダーラで破仏を行ったとする説には、確たる証拠がないことを論証して見せた。また宋雲のルートを検討することによって、エフタルが本拠地たるヒンドウクシユの北側からガンダーラ方面に進出したルートをつきとめようとした。そして七世紀に玄奘が通ったヒンドウクシユを越えて、カーブル河沿いに

ガンダーラに至るルートが利用されていないという事実に着目した。この中央アジアからガンダーラに至るルートの変化こそ、パルミヤーンの大仏の年代問題など、多くの難問を解く鍵になる。このようにいけば従来から知られている史料でも、深く読み込むことによって新事実を発見し、それらを組み合わせて従来未解決とされる問題を説明するというのが、桑山氏の一貫したスタイルで、得られる新知見の射程がすこぶる広い。行歴僧の伝記を綿密に検討したことはすでに述べたが、ジナグプタの伝記の中で、五五五年にガンダーラを出発した彼がエフタルの王庭で「時艱」に遭遇したという記事に着目して、これが五五五年の突厥によるエフタル攻撃に対応すると見なした。これなどもわずかの記事を見逃さず、重要な歴史的事実を見いだそうとする氏の研究方法のよい例であろう。

偶然か必然か、桑山氏が取り扱うテーマはエフタル問題など、中央アジア史上の難問中の難問で、今なお未解決のものも多い。牛頭の冠をかぶった王の像を刻したNapī コインに関する問題は典型的な例である（論文13）。氏は『隋書』の「西域伝」の漕国の条に、王は金の魚頭冠をつけるとあるが、本文批判によって本来「金牛頭冠」であったことを確認した。一方で、『西域図記』の序文に見えるインドへのルートの分析から、漕国はザーブリスターンであるとする定説を覆し、実際にはカーピシーに対応することを論証した。その上で多数存在する類似のコインの分類・整理と編年を試みた。氏がNapīと読む銘文を現在多くの研究者はNizak (nyzky)と読み、問題の王はKhingila=馨婁王朝に属し、エフタルではないとする氏の説も必ずしも広く受け入れられ

ているわけではない。しかし隋の時代のカーピシーの王が牛頭冠であったという指摘は、この種のコインの発行地と時代を考える上での座標軸を提供したという点で高く評価されるであろう。

Nizakは大方の見解では、エフタルの支配者（英雄）のeponymであるとされる。同様にeponymとされるKhingilaに関しても謎が多い。論文15でもこの問題に触れているが、最近、*epityulo*という銘を持つ印章が発表された。報告者によれば五世紀半ば頃のものだとし、Khingilaの名前（称号）が現れるものとも早い事例だという。そしてその名前ないし称号が後のこの地域の王たちによって受け入れられたとする。いずれにしても桑山氏のKhingila王朝説は採用しつつある。Cf. P. Callieri, "The Bactrian seal of Khingila", *Silk Road Art and Archaeology* 8, 2002, pp. 121-142; N. Sims-Williams, "The Bactrian inscription on the seal of Khingila", *ibid.*, pp. 143-148. 要するに桑山氏が追求してきた五、六世紀以降のカーピシー関係の資料がほとんど発見されており、今後とも氏が集めて整理した史料は参考にされることになるであろう。

桑山氏は、自分が発掘にたずさわったカーピシー・カーブル地区のタパ・スカンダルのヒンドゥー教の遺跡や神像の編年や、当時の支配者、当時の首邑の場所には並々ならぬ興味を持って精力的に論文を発表した。上で紹介したもの以外では論文10・11・12・14が、遺跡と漢文史料との関係、ベグラムの遺跡最新層の編年、出土するヒンドゥー教の神像を扱っている。首邑の位置が、ベグラムからカーブルに遷った経緯は論文16でも触れられている。玄奘がはじめて言及した、カーピシーとザーブリスターンの間の

弗栗特薩儼那にはそぼそと暮らしていた突厥は、七世紀の終わりには強大となり、ベグラムにいた Khingila 王朝から統治権を篡奪し、カーブルに都を遷したというのが桑山氏の考え方である。

(なお弗栗特薩儼那の位置と原語に関しては、稲葉稜の最近の研究『ナナイ・カラ石窟開窟の歴史的背景について』『西南アジア研究』58, 2003, pp. 83-96 が発表された。) 氏のこのシナリオは、稲葉稜「七—八世紀のザブリスターンの三人の王」『西南アジア研究』35, 1991, pp. 39-60 の研究にも多くを負っている。この突厥系の支配者の時代にヒンドゥー教の神像が属するとする。

ここでいう突厥が、慧超の報告に基づいて西突厥に由来するのではなく、全く別系統のトルコだとする桑山氏の説を、評者はかつてはいぶかしく思っていた。他のどんなトルコ系の民族がここに存在し得るのか? しかし最近発表されたバクトリア語文書には、七世紀の終わりにヒンドウークシュにトルコ系のハラジ族がいたことを示唆するものがあり、問題の突厥はハラジ族に違いないだろう。こうして八—九世紀の「汎カーピシー」の支配者としてハラジ族を想定することによって、慧超の報告と桑山の氏の推定が正しいことが確認されたと考えられるのである。

以上評者の興味に従って、若干の収録論文の内容や問題点を紹介した。最後に本書で注意すべき点をいくつか指摘しておきたい。一つは掲載された論文は、オリジナルの出版物とくらべると多くの点で変更が加えられている点である。単に英語の表現を変更したものがほとんどだが、論文発表後に判明した知見も含まれている。論文1を例にとれば、本来の論文のほぼ一・五倍になっており、全く別の論文という印象を受ける。つまり本書に収められた

論文は単なる再録ではないのであって、引用に際しては注意を要する。この点は本書のどこにも明記されていないので、特に注意を喚起した。一方でこの点は桑山氏の研究の特色のひとつでもある。氏の著作目録を注意深く見ると、非常に早い時期に得たアイディアを後にスバイラル式に深化・発展させて、新しい論考を発表していることがわかる。論文1について言えば、つい最近も関連する論考を発表している・「仏像出現ごろのタキシラ 層位と編年」『東方学』106, 2003, p. 1-20。

二つ目は、第一の点とも関連するが、漢字の表記と引用についてである。たいていの場合、オリジナルの論文ではピンイン表記以外に漢字そのものも添えられているが、本書には一字の漢字も提示されない。論文8(本書p.140)の表題の末尾に付された星印(*)は、本来の出版物では論文の末尾に漢字が与えられていることを示す注記であったが、本書では星印だけが残ることになって、オリジナルを持っていない人には、この星印の意味がわからない。上でも述べたとおり本書は、主に欧米の研究者を読者に想定した論文集であるが、漢字にうとい彼らだけでなく漢字に親しんでいる我々にとつてすら、ピンイン表記だけから本来の漢字を突き止めることはかなり難しい。

ちなみに本書のような特殊な地名や人名を多く含む本としては、誤植や単純な誤りは多くない。しかしそれでも、やはりいくらかは桑山氏の目を逃れて存在する。深刻なものほとんど見あたらないが、論文7・8において、*sutra* とあるべき語が単に *s* となっている点は注意を要する。この二つの論文では別に、次の点も訂正を要する: p. 128 下から一六行目 identifiable の後を *te*、

spectively with Kushan and Kidara に改める ; p. 133 下から八
行目の Kunduz の後に river を挿入する ; pp. 134-135 では Elaq
(イタ) は漢文の原文の「部落」「部」の翻訳であるが、その原

語について説明が欲しいところである。論文 8 ではクチャが常に
Qizil と表記されている。

(Institute for Research in Humanities, Kyoto University,

Kyoto, 2002, pp. xii+297, 34 illustrations, size B5)

(神戸市外国語大学教授